

日本語動詞の語義記述の手段を求めて —構文的結合関係から—

One Proposal for the Description of the Lexical Meaning of Japanese Verbs Based on their Syntactical Properties

岡 田 幸 彦*

OKADA, Yukihiro

【要旨】

現代日本語において、動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義の特徴とは、密接に対応しているということが出来る。奥田（1967）は、「自由な意味」「連語の構造にしばられた意味」という形で、動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義の特徴との対応を定式化しているが、多義的な動詞の語義の特徴と対応しているのはどのような結合関係か、という観点からより具体化すると、(A) 主体の種類の違い、(B) 結合相手の名詞の種類の違い、(C) 結合相手の名詞の格形式の違い、(D) 特定の格形式の名詞と結合する場合、結合しない場合の違い、といったものがある。

【キーワード】多義的な動詞、語義の特徴、名詞の格形式、結合関係、連語の構造

0. はじめに

現代日本語において、ある動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義の特徴とは、密接に対応している、ということが出来る¹。このことがより明確になるのは、多義的な動詞の場合である。例えば、

- (1) 三時すぎ孝平は「二十分で戻る」と傍らにいた柴田にいいおいて、研究室を出た。(丘の・197)
- (2) 信夫は、キュッキュッと鳴る雪の道を歩きながら、駅前通りに出た。(塩狩・269)

(1)「研究室を でる」では「研究室」において始められる移動が表示されているのに対し、(2)

「駅前通りに でる」では「駅前通り」に到る移動が表示されており、どこにおいて始められる移動であるかについては言及されない²。

このような、動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義の特徴との間の対応には、どのようなものがあるだろうか。

1. 先行研究

現代日本語における、動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義との対応について定式化したものとして、奥田（1967）を挙げることができる。ここではまず、条件にしばられない「自由な意味」が提示される。

単語の語彙的な意味のなかには、現実の世界の物や現象や過程や質など、ひとときの現実

* おかだ・ゆきひこ
埼玉大学教育機構 非常勤講師

と直接にかかわって、それを名づけているものがある。…この種の語彙的な意味は、多義語において、そこからいくつかの派生的な意味がでてくるということで、基本的である。また、表現的にはことなる同義語の系列において、出発点の役めをはたしている。この種の語彙的な意味は、その存在が文のなかで単語の機能、連語の構造、単語の形態、慣用句にしばられていないということから、**自由な意味**とよぶことができる。(奥田 (1967 : 5))

しかし、「しばられていない」としても、「自由な意味」も結合関係と無関係ではない。「自由な意味」自体が結合関係を作り出し、その「構造」は「自由な意味」の特徴と密接な関係を持つ。

…自由な意味は、文法的な構造に条件づけられてはいないとしても、文法的な構造をつくる能力はもっている。そして、その能力は、語彙的な意味とからみあっているかぎり、自由な意味をあかるみにだす手だてとしてはたらく、いいかえるなら、他の単語との文法的なむすびつきは、語彙的な意味の性格、ある単語が現実のどの側面をきりとっているかということをあかるみにだしてくれるのである。(同 (同 : 6))

一方、**みる**が「○○に ○○を みる」という結合において用いられる場合に「みとめる、みつける、発見する」という語義で用いられることに関して、奥田 (1967) は以下のように述べる。

動詞「みる」における／みとめる、みつける、発見する／という意味は、特定の構造的なタイプの連語のなかでのみ実現していて、そのそとには存在しえない。したがって、このよ

うな語彙的な意味は、**連語の構造にしばられた意味**、あるいは**構造的にしばられた意味**とよぶことができる。構造があつて存在するというので、構造に媒介されて現実とかかわっているということで、自由な意味とは、そのあり方がことなる。(同 (同 : 8))

「自由な意味」の場合には、動詞の語義が結合関係を作り出し、「連語の構造にしばられた意味」の場合には、特定の「構造」の「連語」において動詞の語義が変更されるという違いはあるが、どちらの場合にも、動詞と名詞の結合関係と、その動詞の語義の特徴とは、密接に対応している、ということができる。

本稿では、多義的な動詞が用いられている結合関係と、その動詞の語義の特徴との間の対応、特に、どのような結合関係においてその語義の特徴が変更されうるかについて、より具体化することを試みる。

2. 動き・状態の主体の種類と動詞の語義

動詞の語義の特徴の決定に関して、最も重要な役割を果たしているのは、表示される動き・状態の主体の種類が何であるか、という要因である。

(3) 敦子の前に黒い革の上着を着た綺麗なほっそりした上級生が立っていた。(雲の・62)

(4) そして庭の真ん中に、時折かすかな上空の風に葉を揺らしながら、その大きな木が立っている。(ポプラ・15)

(3) では、「上級生」が「敦子の前に たっていた」主体であり、「敦子の前」という地点における「上級生」の存在が表示されている。この存在は「上級生」の「敦子の前」への空間移動の結果でもある。一方、(4) では、「(その大きな) 木」

が「庭の真ん中に たっている」主体であり、「庭の真ん中」という地点における「木」の存在が表示されている。この存在は何らかの動きの結果とはいえない。ここでは、「(地点) に たっている」主体が何であるかと、たつの語義の特徴とが対応している。

このような、動き・状態の主体の種類と、動詞の語義の特徴との対応は、宮島（1972：510～）によるあがる、のぼる、でる等の語義記述にみるように、特に自動詞の場合に重要である。「連語論」では「主体」と動詞との関係を扱わないため、このような対応関係は、奥田（1967）の「連語の構造にしばられた意味」には入らないことになる³。

3. 結合相手の名詞の種類の変更

(2) 「駅前通りに でる」にみるように、「(地点) に でる」では、その地点に到る移動が表示される。一方、次の「報復手段に でる」では、「報復手段」を実行することが表示されている。

- (5) 「…ゲリラにルーマニア製自動小銃が渡ったことがわかれば、そこの政府が、自動車や農耕機具の輸入停止という報復手段に出ることだってありうるのです」（雲の・334）

地点を表す名詞ではない「報復手段」が名詞+として用いられているため、特定の地点に到る移動を表示するという「(地点) に でる」にあった語義の特徴が変更されている⁴。

また、以下の(6)「ショルダーバッグを 傍らに おく」では物がある場所・地点に移動させることが、(7)「菊を 家に おく」では人がある場所・地点にいるようにさせることが、(8)「スイスに 籍を おく」では国籍をスイスにしていることが、それぞれ表示されている。

- (6) 大吉は黒いショルダー・バッグを傍らに置くと、大きな身体をどしんと落すように椅子に坐った。（雲の・47）
(7) 母にさからって菊を家に置いたとしても、永野家はもはや、菊にとって安住の地ではあり得ないと貞行は思った。（塩狩・44）
(8) 所属はスイスに籍を置くマッキントッシュ社だし、扱う荷も、運ぶ国も、日本とは関係がない。（雲の・329）

以上の例では、「○○を（場所・地点）に おく」における名詞+をの種類の違いと、おくの語義の特徴の違いとが対応している。

一方、以下の(9)「鍵を だす」では物を移動させることが、(10)「熱を だす」では発熱という現象が起こることが表示されている。ここでも、名詞+をの種類の違いと、だすの語義の特徴の違いとが対応している。

- (9) おばあさんは、黒いハンドバッグを開けて鍵を出すと、私のほうに差し出す。（ポブラ・95）
(10) 十月に入ったばかりのある朝、とうとう、と言うべきか、私は熱を出した。（ポブラ・27）

4. 特定の格形式の名詞との結合関係の変更（i） —結合する名詞の格形式の違いによる場合

以下の(11)「会社に いく」では「会社」に到る移動が、(12)「そこを いったり きたり」では「そこ」における移動が表示されているが、「そこを いったり きたり」では移動の終了については言及されていない⁵。ここでは、名詞+にとの結合、名詞+をとの結合という違いが、いくの語義の特徴の違いと対応している。

(11) 翌朝、会社に行くとすぐ、信夫は和倉礼之助に、午後から休ませて欲しいと、早退の届けを出した。(塩狩・301-302)

(12) 四角い石だたみを敷いた古めかしい中庭には、パトカーや大小の乗用車がおだやかな五月の午後の太陽を浴び、制服の巡査がのんびりした表情でそこを行ったりきたりしていた。(雲の・124-125)

以下の(13)「居間へ すすむ」では「居間」に到る移動が、(14)「団地脇を 西に すすむ」では「団地脇」における移動が表示されているが、(14)では「西に」は移動が行われる方向を表示しており、移動の終了については言及されない。また、(15)「最上階に のぼる」では「最上階」に到る移動が、(16)「階段を のぼっている」では「階段」における移動が表示されているが、(16)では移動の終了については言及されない。これらの例においても、名詞+にあるいは名詞+へ、名詞+をとの結合関係という違いと、動詞の語義の特徴の違いとが対応している。

(13) 馬見原は、無造作に靴を脱いで上がり、居間へ進んだ。(幻世・84)

(14) 二つ先の駅に行く道はいくつかあったが、常識的には駅前に出て陸橋を渡り、大きな団地脇を西に進むことになる。(丘の・253)

(15) 冴子は人気のない超高層ビルの最上階に登ると、深夜営業の喫茶店に入り、窓際の席に坐った。(雲の・394)

(16) 容子が珍しくバテ気味で階段に登っている。(六番目・57)

5. 特定の格形式の名詞との結合関係の変更 (ii)

一特定の格形式の名詞が加わる場合

以下の(17)では、何らかの格形式の名

詞と結合していない「たつ」によって姿勢の変化が表示されているが、(18)「トイレに たつ」では「トイレ」を目指す移動が、(19)「席を たつ」では「席」において始められる移動が表示されている。名詞と結合せずに用いられる場合、名詞+にとの結合において用いられる場合、名詞+をとの結合において用いられる場合、という違いと、それぞれの場合におけるたつの語義の特徴の違いとが対応関係にある⁶。

(17) しばらくの間、私はまるで惚けたように、ほかの皆にあわせて立ったり、跪いたり、腰掛けたりを繰り返していたが、いつの間にか、目は正面の十字架に釘付けになっていた。(ポプラ・110)

(18) 私がトイレに立とうとすると、カーディガンを肩にかけてくれて、用を済まして私が出てくるまで、ずっとトイレのドアばかり見ていてくれるのだ。(ポプラ・27)

(19) 敦子は席を立ち、洗面所にいつて戻ってくると、冴子が窓のほうへ顔を向けて彫像のように坐っていた。(雲の・275)

6. まとめ

以上から、多義的な動詞の語義の特徴と対応し合う、その動詞と名詞の結合関係として、以下の場合があることがわかる。

- (A) 主体の種類の違い (2 節参照)
- (B) 結合相手の名詞の種類の違い (3 節参照)
- (C) 結合相手の名詞の格形式の違い (4 節参照)
- (D) 特定の格形式の名詞と結合する場合、結合しない場合という違い (5 節参照)

参考文献

岡田幸彦 (2013) 『語の意味と文法形式』 笠間書院

——— (2016)「現代日本語の「格」記述のための序論—格形式と意味決定要因—」埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書別冊1『ことばの本質を求めて—小出慶一教授退職記念論文集』 pp. 44-56

——— (2017)「現代日本語の連用成分についての一考察—名詞の文法的意味・動詞の語義から—」埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2『言語をめぐるX章 言語を考える、言語を教える、言語で考える—仁科弘之教授退職記念論文集』 pp.142-156

奥田靖雄 (1967)「語彙的な意味のあり方」
(奥田靖雄 (1985)『ことばの研究・序説』
pp. 3-20, むぎ書房)

——— (1968-72)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983) pp. 21-149)

言語学研究会編 (1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房

宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』
秀英出版

用例

恩田陸『六番目の小夜子』新潮文庫／辻邦生『雲の宴 (上)』朝日文庫／天童荒太『幻世の祈り』新潮文庫／三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫／山田太一『丘の上の向日葵』新潮文庫

¹ 現代日本語の移動動詞の語義の、「形式的側面」「範ちゅう的な側面」(宮島 (1972 : 671))としての、特定の格形式の名詞との結合関係から見た特徴については、拙稿 (2013) で考察した。

² 拙稿 (2017)。なお、**でる**の語義の詳細な記述は宮島 (1972 : 563-607) 参照。

³ 「主体」は、(3) (4) のように名詞+**が**によって表示される場合の他に、(3-1) のように名詞+**は**によって表示される場合、(3-2) のように動詞に修飾される名詞によって表示される場合等がある。主体との関係について定式化するためには、文の構造についてのより広い考察が必要になるであろう。

(3-1) 二人はにらみ合うようにして物置の屋根の上に立っ
ていた。(塩狩・13)

(3-2) ただセーヌの向うに高く建っているノートル・ダム
だけは照明を浴び、騒然とした街から抜け出たように
灰白く高貴に夜空に浮び上がっていた。(雲の・21)

⁴ 拙稿 (2017) では、**でる**のこれらの用法について、「連用成分」としての名詞の格形式の観点から考察した。結合相手の動詞の語義の特徴に変更を起こす要因となりうる名詞の格形式は、名詞+**を**、名詞+**に**が主であろう。

⁵ 拙稿 (2017) では、**いく**のこれらの用法について、「連用成分」としての名詞の格形式の観点から考察した。ここでも、0 節の**でる**の場合同様、語義の特徴の変更を起こす要因は、名詞+**を**、名詞+**に**との結合関係である。

⁶ 奥田 (1967-72 : 28-31) では、**ならべる**、**ひろげる**等の動詞が、名詞+**を**のみとの結合において用いられている場合の語義の特徴と、名詞+**を**、名詞+**に**との結合において用いられている場合の語義の特徴の違いについて言及されている。